

## 2019年度「障害者週間のポスター」優秀賞作品

小学生区分



### 「ブルーペイント大作戦」

まつだ くれあ

松田 紅愛

山形県 西川町立西川小学校(5年)

【作者コメント(作品で表現したかった内容、作品テーマ等)】

ブルーペイント大作戦というイベントに参加して、障がい者の人が親切に教えてくれて一緒に作ったことがとても心に残った。

中学生区分



### 「どんな人でもつながれる」

せんしゅう すずか

千秋 涼奏

奈良県 奈良女子大学附属中等教育学校(2年)

【作者コメント(作品で表現したかった内容、作品テーマ等)】

絵の中の積み木のように、障害の有無に関わらず、誰かを支えていて支えられているという関係であって、社会の中での役割を担っているのだということを伝えられたらいいなと思いました。

## 2019年「心の輪を広げる体験作文」最優秀賞作品

2019年度「心の輪を広げる体験作文」審査委員会委員長 三田誠広

小学生区分

### 「希望の星」

やすだ わく 鹿児島県  
安田 湧 鹿児島市立西紫原小学校(5年)

かつて重い病気で施設に入っていた書き手が、回復した後にその施設を訪ねる話だ。施設にいたころ親しかった少女が、いまでも同じ症状を負っていることを知る。そして施設の人々が大幅に病状が回復した書き手を「希望の星」と呼ぶ。そのことで書き手自身が、施設の人々や家族に感謝の気持ちをもつ経緯が、心のこもった筆致で語られている。

中学生区分

### 「障がいのあるとき」

つるじゅりあ 福岡市  
鶴樹里愛 福岡市立元岡中学校(3年)

通常は健常者に見えながら時に重篤な発作が起こる書き手の立場から、障害のあるなしで単純に線引きすることの問題点を、自らの体験を踏まえて語っている。つねに誰かの手助けを必要とする場合もあれば、ふだんは健常者と変わらない生活ができるものまで、障害の度合いは多様であり、そうした状況を把握した上での相互理解の必要性を指摘する書き手の論点には説得力がある。

高校生区分

### 「障がい者の家族として」

はせがわ あゆみ 大分県  
長谷川 歩 大分県立国東高等学校双国校(2年)

弟の障がいの度合いが進んでいくことで苦悩をかかえている書き手が、ボランティア活動を通じて多くの障がい者と接した体験から、しだいに心を開いていく過程を描いている。障がい者の存在は家族にも負担をかけることになるが、与えられた状況を受け容れ、覚悟をもつことの大切さが伝わってくる。

一般区分

### 「あっち側とこっち側」

おおすみ きょうこ 滋賀県  
大角 今日子 公務員

障がいを持って休職したのち、職場に復帰した書き手に対して、障害者手帳をもっている人は「あっち側」だという、心ない差別的な発言が投げかけられ、そのことにショックを覚えるという話。共生社会の実現のためにまだ高いハードルがあることを実感させられる。